

奥山久米寺の調査

(A 昭和54年4月～昭和54年5月)
(B 昭和54年9月～昭和54年10月)

本年度は家屋新築に伴う2件の小規模な調査をおこなった。A調査地は塔跡の東北方130m、B調査地は同じく西北方70mである。いずれも寺域あるいは隣接地に推定している個所である。

A 調査地

南北に細長くのびる微丘陵上の東縁に位置し、99㎡の範囲について調査した。水田耕作土下の層序は床土、瓦片および瓦器を含む灰褐色土整地層、バラス混り砂質地山となり、地山面は東に向かって緩く下降する。検出した遺構のほとんどが近世の遺物を伴う土壇などで、あきらかに奥山久米寺と関連する遺構はなかった。ただ、調査区の東端近くに、根石とみられる大小の川原石が詰った掘形状のピットが3個あった。各間寸法は南北4m、東西2.3mであるが、建物としてまとまらないこと、方位が大きく振れることなどから直ちに寺との関係を言及できない。なお出土遺物には7世紀の土師器・須恵器が少量あり、そ

のほかに瓦がある。瓦のうちには重弧文軒平瓦や、角端点珠形式素弁蓮華文軒丸瓦で8弁のものと11弁のものがそれぞれ1点出土している。

B 調査地

昭和51年度に奥山久米寺の西方で確認した奈良時代以前の南北大溝（概報7）の北延長上にあたり、大溝の東岸に近接することから、これに関連する遺構の存在が予想された。しかしわずか15㎡の小面積の調査であったために斜行する細溝2条を検出したにとどまった。



調査地位置図